

# AVvillage エー&ヴィヴィレッジ

2004年7月1日 (7月号) No.68

オーディオとビジュアルを積極的に情報発信する隔月誌

## オーディオワールド 2004 7

2004  
No.68

読者のみなさま  
ありがとう!

8月27日(金曜日ナイター)、8月28日(土曜日)、東京・神田明神・明神会館において実施します。参加グループが心を込めた新しい実験をいたします。ワールド特別企画の格安商品も販売されます。お誘いあわせの上、ご来場下さい。

### オーディオ試聴会 真空管アンプ 12機種を試聴する

聴いたのはいつもの藤岡誠、高橋和正、神崎一雄さんの3名。今回はここで試聴したアンプの中からプリアンプを除く10機種を出力から負荷抵抗で相島さんがDATに直接録音しました。これをマスターにしたCD-Rをボランティア価格でおわけしますので、ご自分の装置で評論家3名の試聴感と比較しながら、その音をお確かめ下さい。



### 世の中変わってきています



この写真はNHKの技術展に出品された超小型・高性能のシリコンマイク。小豆粒みたいに小さいのです。これで近くオーケストラを録音するのだそうです。

ケンウッドで発売したAnyMusic対応のケンウッドNZ-07を取材する河村正行さん。現在40,000曲ある音楽を内蔵のHDDにダウンロードすることが出来ますが、曲はさらに増加します。いまこのタイプを発売したのは4社。時代はこういう方向に流れています。



### ビジュアル視聴

## HDDレコーダー 8機種を試聴する

見たのはいつもの麻倉怜士、長谷川教通、河村正行さんの3名。今回は視聴したHDDレコーダーから直接各モードを長谷川教通さんがデジタルテープに録画し、これをマスターにして各社の画質をDVDにしました。ご自分のDVDで3人の評論家のコメントと比較しながら、ご自分で確かめ下さい。

### villageたより>>>われひとり…旅心、より



群馬県・袈裟丸山の尾根つづきの賽の河原付近に群生して咲くシロヤシオ。群馬の岩の多い山には5月の連休の頃アカヤシオの花が夢見るように咲き乱れます。それから2週間遅れてシロヤシオがひっそりと、つつましくやかに咲きだします。美しい花の季節です。

### 新アクセサリ登場



ニューヨークのホームエンターテインメントショーよりマイケル安田のリポート。驚くほど反響を吸収する板(Svelte Shelf)。詳しくは本文をどうぞ。

マスターCD-R用に開発された制振素材M2052を塗布した新しいCD-Rです。これがまことによしいらしいのです。もちろん通常オーディオでも使用可能です。詳しくは本文をどうぞ。



### エンゼル・ポケット・秋葉原



ローカルメールのショールーム&即売所そしてA&Vvillageの情報交換室、各種催し実施ご来場をお待ち申し上げます。  
TEL 03-5294-3501

### 電源事情測定…飯田明さん宅を訪問 好評!! 体験レポート 充実!! 読者だより



2004年を切り開く!!  
コスモヴィレッジ・インターネット  
どこよりも早く・どこよりも簡単  
充実したニュースをお楽しみ下さい  
<http://www.avvillage.com>

# HTタイプを贅沢にも6台使って5・1chに挑戦！ 音場の見通しの良さ、ディテール描写のみごとさは特筆

●長谷川教通

## パワーアンプのイメージを 根底から覆す

ちょっとデジタルアンプにはまっつしまつた。これまでデジタルアンプというと、パナソニックやビクターの薄型AV



横に並べても約25cmにしかならない。これで合計600Wものパワーが出る！あまりに軽いので、硬いケーブルを使用すると、本体が動いてしまう。



M100proの6段重ね。重さも4kg弱。実際に持ってみると、いかに軽いか実感できる。

アンプがあり、このコンパクトで軽量なアンプで何百Wものパワーを出せるのか：と驚きながら試聴していたし、実際に出てくる音は、パナソニックを例にすれば非常に整っており、にこりの少ない音で、5・16万円のAVアンプの中では十分個性を発揮できると感じた。

その一方で、ハイグレードなアナログアンプと比べると、やはり物足りない。物量も価格も違うのだから当然といえば当然なのだが、その違いはサウンドの厚みであったり、温度感であったり、きめの細かさや密度感：といった、いわば音質の根幹になる要素だったので、これがデジタルアンプの限界なのか、それともデジタルアンプはもっと音が良くなるのか、その点を確かめてみたかった。

そしてフライイングモールドのデジタルアンプに出会ったのだ。先日カスケードシリーズを使ってみて、スピーカーをしかりと鳴らし切るドライブ力の確かさ、微小レベルの信号に対する追従性の良さ、グリーンと伸びてくるダイナミックレンジの広さ、温かみさえ感じさせられる響きとして第一級の音質を持っていった。それにしてもコンパクトだし、抜群の

コストパフォーマンス。で、他のシリーズはどうなんだろう：と、評判のDADIM100proを使ってみることにした。何しろこのM100proは超コンパクト。おそらく写真で見たくらいでは、ピンとこないだろう。しかし、実際に手にしてみると、ほんとにビックリするばかり。まさにのひらに軽いのってしまふほどのコンパクトさ。その上、何という軽量さだろうか。たった650g程度しかないのだ。「パワーアンプ」というイメージを根底から覆してしまうほどのコンパクトだ。これで100W？

そうなのだ。モノラル仕様の8Ω接続で100Wの出力をもっている。製品仕様としてはバランス入力、BITタイプ、バランス入力・バナナプラグのBBタイプ、ホームシアター用のHTタイプがある。今回はHTタイプを贅沢にも6台使って5・1chに挑戦。贅沢といったって、1台3万6750円だから、合計でも22万円強の投資で買ってしまう。

でも、断言しておくが、これは20万円程度のマルチチャンネルアンプの音では絶対でない。リアパネルはRCAビンの入力端子と、バナナプラグ対応のスピーカーターミナル、それにAC用コンセン

トが付いている。うんっ?? ということは、これで電源内蔵なの???

信じられない。いくら効率の良いデジタルアンプだからといって、これで100W、4Ωなら160Wのパワーアンプなのだ。SPターミナルがバナナプラグ対応なのは嬉しい。マルチチャンネル&サラウンド再生ではSPケーブルの本数が多い。ましてやケーブルのつなぎ換えを頻繁に行う者には、とにかくバナナ対応がイチバン。先に試聴したカスケードシリーズで唯一の不満はSPターミナルがバナナ対応でないことだ。

さて、問題はパワーアンプの設置方法だ。もしAVブリとパワーアンプをラック内にセットし、リアスピーカーまではSPケーブルで引き回す：という一般的な設置方法ならカスケードシリーズをお薦めしたい。M100proのアドバンテージは、パワードスピーカーのように使えること。つまり、パワーアンプとスピーカーを一体化できるのだ。

フロントパネルには電源スイッチと入力ボリウムが付いているので、それぞれのチャンネルを単独で電源オン・オフできるし、しかもSPケーブルを最短にできる。もちろんラック内にM100p



M100proの6段重ね。重さも4kg弱。実際に持ってみると、いかに軽いか実感できる。

roを6台並べてセットしてもいいだろう。あるいはサブウーファーがパワータイプなら、M100proは5台でもいいわけだ。あるいは6:1ch、7:1ch:とチャンネル数を拡張したければ、1台ずつ追加購入すればいい。

こういうフレキシビリティがあるのはいい。私のシアターではサブウーファーが壁埋め込みとなっており、ドライブレ用のパワーアンプが必要で、普段はラックスのM106aというA級50W×2chパワーアンプをBTL接続にし、250Wモノラルアンプとして使っている。ま、巨大で非効率極まりないアナログアンプを使っているわけだ。これこそ贅沢。

ところがである。この巨大アナログアンプの代わりにM100proをつないだのだが、ウーン、ドライブレ力ではいい勝負するではないか。ちょっと複雑な気分になってしまった。

### 6ch分で22万円強 とんでもないC/Pだ

AVプリはバイオニアのVSA-10だ。10だが、ではAX10のパワー部とはどんな勝負をするのか。まず感じるのは音の傾向がかなり違うということ。AX10はバイオニアらしくパワーフルでワイルド感もあり、音が前に張り出してくる。AX10Aiではもっと張り出し感が強くなる。しかし、さすがに電源の強化やアナログ的な音質の追い込みを加えているだけあって、下手な2chアンプが足元にも及ばないくらいの描写力を持っている。

かりと鳴らし切るドライブレ力の確かさ、微小レベルの信号に対する追従性の良さ、グリーンと伸びてくるダイナミックレンジの広さ、温かみさえ感じさせられる響きの素直さ……どれをとってもパワーアンプとして第一級の音質を持っていた。それにしてもコンパクトだし、抜群の



フロントパネルには電源SWとインジケーター、入力レベルがあるだけ。リアパネルもシンプルそのもの。SPターミナルはバナナプラグ対応だ。

それに対してM100proは、音場の見通しの良さ、ディテール描写のみごとさ。これまでのデジタルアンプのイメージでは、明瞭度はある粗っぽいとか、逆量感はあるがピンぼけ気味……と、両極端に分かれているが、フライングモールのアンプに限っては、そんな低次元の音質ではない。非常に正確な描写で、細かい音もしっかりと描いてくれる。その結果、温かく柔らかなトーンにまで到達している。これはすごいと思う。

それじゃあ……ということ、私が2chで常用している6C33BのOTLアンプとの比較。これはかなりハイレベルでの戦いだ。実際にはんだごてを持って製作したのは自分だというひいき目もあるだろうが、分解能と雰囲気描写でOTLかな……という判断だが、2ch分のコストでいえば怖ろしいほどの違いがある。このOTLアンプも、自作の手間を除

1台3万6750円だから、合計でも22万円強の投資で買えてしまう。でも、断言しておくが、これは20万円程度のマルチチャンネルアンプの音では絶対ではない。リアパネルはRC Aピンの入力端子と、バナナプラグ対応のスピーカーターミナル、それにAC用コンセン



M100proを6連装して持ち運び可能にするマウント用オプション。

ければ30万円そこそこのアンプであり、驚異的なコストパフォーマンスを誇っている。海外製のウン百万円のアンプを蹴散らしてしまうほどの実力……なのだが、M100proはステレオで7万円強。6ch分で22万円ちょいとなのだ。これは、とんでもないC/Pだ。

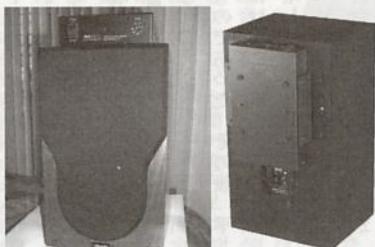
やはり音場の明瞭度が特徴的だ。スピーカーを正確にドライブしている……という鳴り方。カスケードシリーズに比べるとわずかに分解能で劣るが、逆に艶っぽさやコクのある表現になるのがいい。

これを5:1chで鳴らしたときのつなりの良さも特筆されていい。リアをいい加減にするとサラウンドの面白さは半分も味わえない。リアチャンネルに入っている信号を正確に再現してくれないと、サラウンド感が十分に表現されないからだ。ドンパチの映画だけを楽しむなら、そこそこのアンプとスピーカーでも何と

使えること。つまり、パワーアンプとスピーカーを一体化できるのだ。フロントパネルには電源スイッチと入力ボリュームが付いているので、それぞれのチャンネルを単独で電源オン・オフできるし、しかもSPケーブルを最短にできる。もちろんラック内にM100p

かなるが、全チャンネルがスムーズにつながって、サラウンド音場のリアリティを描写するには、どうしてもドライブレ力のあるアンプが必要になる。

こうなると、優れたマルチチャンネル・プリがほしくなる。外国製の法外な価格のアンプなどほしくはない。デジタル技術の可能性を追求した、音の温かいアンプがほしいのだ。ぜひともフライングモールに作ってほしいと思う。



charioとM100proを組み合わせて、パワードスピーカーにすることもできる。スペースファクターも抜群。

コンパクトなスピーカーではどうなるかと、チャリオをつないでみた。このスピーカーを十分ドライブするのはけっこう大変。ドライブ力のないアンプで鳴らすと、生彩のない音になってしまうが、M100proはラクラクと鳴らし切ってくれる。音の輪郭がしっかりと明瞭な音像が描かれているが、決して鋭すぎることはな。分析的な鳴り方とはまったく異なる「音楽」を聴かせてくれる。

低域にも伸びがあり、量感も十分。このサイズから?と疑いたくなるような迫力だ。プーミーさとは次元の異なる厚みがある。